

Title	山田長政の秘宝譚 : 『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで
Author(s)	橋本, 順光
Citation	日本研究論集. 2015, 12, p. 99-131
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90014">https://hdl.handle.net/11094/90014</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山田長政の秘宝譚  
— 『日東の冒険王』 からオーストラリアの伝説まで —  
A Japanised *King Solomon's Mines*  
Yamada Nagamasa's Treasure Narrative and Its Influence on  
Australia

橋本順光\*

大阪大学大学院文学研究科(比較文学専修)准教授

要旨

高垣眸の『豹の眼』以降、日本における宝探しの物語はその宝を継承する正当性の確認がもう一つの主題となっており、山田長政の秘宝をめぐる南洋一郎の『日東の冒険王』(1937)はその典型的な例といえる。本論では、その話形が戦後も継承された一方で、オーストラリアで埋蔵金伝説が生まれた経緯を対比する。

キーワード：南洋一郎、W・G・ゴダード、レジナルド・インガメルズ

Abstract

Japanese treasure hunt narratives, loosely based on Haggard's *King Solomon's Mines*, seems to emphasise that the Japanese character(s), attempting to create an ideal empire, should have the treasure in foreign land. One of the best examples is Minami's *Nitto no Boken* [Japanese Adventurers, 1937], dealing with Nagamasa's hidden treasure in Thailand. While the framework of the novel is still reused in Japanese popular culture or manga, Nagamasa's treasure narrative

---

\* Hashimoto Yorimitsu, Associate Professor, Osaka University

e-mail: yorimitsuhashimoto@gmail.com

coincidentally brings about the legends concerning his buried treasure in Australia.

Keywords : Minami Yoichiro, W. G. Goddard, Reginald Ingamells

## 1. 序 『宝島』と『ソロモン王の洞窟』の融合—軍資金としての宝

R・L・スティープンソンの『宝島』(1883)は、宝を探す過程で少年が成長する物語である(橋本 2014b)。『宝島』は日本で多々翻訳あるいは翻案されてきたが、もっとも成功した一つは高垣眸の『龍神丸』(1926)とあってよいだろう。高垣は、少年時代から愛読した『宝島』を、キャプテン・キッドならぬ村上海賊の宝をめぐる争奪戦に置き換え、その継承正当性についての物語へと作り替えたが、その相違点は、以下に引用する宝をめぐる言い伝えからも明らかである。

この莫大な宝は、村上家正統の子孫に譲られるべき物に相違ないが、才  
智力量共に、先祖を辱めぬ者のみが、それを受ける事が出来る。若し不  
肖の者が、この冒険を敢てしたなら、又は、正統な相続者でないもの  
が、猥にこの宝を手に入れようとするならば、それは必ず、宝の恐ろし  
い祟のために、非命に斃れる運命を招くであろう(高垣 1997,p.101)  
1。

宝を受け取るのは、ただ血統上だけではなく、村上海賊の精神を継承した子孫でなければならないというのである。さもないと呪われるだろうという、この遺言こそが『龍神丸』の物語を牽引することになる。宝探しにより少年が成長するという『宝島』以来の主題に加えて、海賊がかつて果たそうとした王道楽

---

<sup>1</sup> 以下、引用に際しては、仮名遣い及び旧字体を読みやすくするため、適宜、変更した。

土をその宝=軍資金として再興するという主題が、ここに織り込まれることになったのである。

とはいえ、この新たな主題もまた英国のもう一つの代表的な宝探しの物語、R・ハガードの『ソロモン王の洞窟』(1885)から転用された可能性が高い。すでに1892年の段階で、『ソロモン王の洞窟』は幸田露伴と滝沢羅文の手によって翻案されており、その『宝窟奇譚』は、北海道のアイヌの人々の村を舞台にしていた。『国会』で連載された後、単行本として刊行されることはなかったものの、『ソロモン王の洞窟』の植民地主義的な主題を置き換えた点で、『宝窟奇譚』はその後の翻案の原形とってよい(橋本2012)。英国の大衆小説に詳しく英語もよくした高垣は、『ソロモンの洞窟』と題したほぼ正確な翻訳を1940年に刊行しており、以前からこうした主題の物語に親しんでいた。ハガードの『ソロモン王の洞窟』には、土地に隠された宝は、それを守り続けた人々やそこに住む人々ではなく、その土地を探検した人々にこそあるという明確に植民地主義的な主題がみられるが、それはいくぶん屈折した形で高垣に継承されることとなったのである。

つまり、高垣が書き加えたのは、滅亡なり敗北によって挫折した王道楽土をその宝によって再興するという主題であった。この主題は高垣の空前のヒット作『豹の眼』(1928)でも継承されており、そこではインカ帝国の末裔を母にもつ日本の少年黒田が、「白人」圧政に苦しむ有色人種の王国を再興するため、帝国の宝を捜し当てる物語として展開された。ただし、『ソロモン王の洞窟』とは異なり、秘境の探検活劇とはなっていない。黒田たちは、その名もジャガーという豹頭の男から秘密文書を手に入れようとするのだが、変装や誘拐によって翻弄され舞台はめまぐるしく変わることになる。その追跡活劇は、モーリス・ルブランの怪盗ルパン・シリーズ、とりわけ『水晶の栓』(1912)あたりの転用だろう。事実、隠し場所が義眼の中というトリックは、この長編に由来し、すでに1921年8月の『新青年夏季増刊号』には『水晶の栓』という題で無名氏による抄訳が掲載されていたので、英訳なり邦訳なりで高垣が目

にしていたとしても不思議ではない<sup>2</sup>。『水晶の栓』では、疑獄に連座した人物リストが「宝」として争奪戦が繰り広げられるが、『豹の眼』でも黒田による宝の奪取は、大義の前に正当化されるのである。このように土地の人々が宝を持ち腐れにしているかのような印象を与え、日本の少年少女こそがそれを受け取る、あるいは資金運用の主導権を持つべきだという主題は、その後の日本の宝探し物語の基調となっていた。

こうした物語に日本的植民地主義を読み取ることは容易だろう。南進論を展開した作家の池田宣政は、その名も南洋一郎の名で『日東の冒険王』(1937)を発表し、山田長政の秘宝をめぐる高垣以来の宝探し小説を発展させた。以下、そんな『日東の冒険王』にまつわる文脈を読み解きながら、長政の秘宝という主題の継承と、副産物としてそれがオーストラリアにまで流布した経緯を指摘したい。

## 2. 高垣眸の冒険小説『豹の眼』と戦後への継承—宝探しと挫折したユートピアの再興

---

<sup>2</sup> 義眼に文書を隠すというモチーフは、以降、日本でも数多くの物語に登場するが、ここで特記したいのは、『豹の眼』とルパン・シリーズをともに愛読した手塚治虫による漫画『奇子』(1972-3連載)である。物語は、主人公の天外仁朗が義眼から秘密文書を取り出す場面から始まり、ひいては暗黒街の顔役にのし上がった仁朗が、異母妹と判明する奇子を監禁から救い出すという大筋をとる。仁朗が、これまでの手塚作品に登場したルパンのようなスタイリッシュな姿であることを思えば、『奇子』は、ルパンとヒロインのクラリスという『水晶の栓』と、理想の王国建設をめぐる『豹の眼』を濃厚に受け継いでいることになろう。両者の混合は、ルパンの『奇岩城』をもじった「奇顔城」が登場する後述の『アラバスター』とも共通しており、手塚がこれまでとは全く異なる作風で暴力と驕慢の世界を描いた双璧ともいえる作品に、少年時代に愛読した小説が共通して顔をのぞかせているのは興味深い。

高垣眸の冒険小説と、それを継承した南洋一郎や山中峯太郎の講談社『少年倶楽部』を中心とする読み物は、1930年代から1940年代にかけて少年時代を送った人々によって、繰り返しその愛着と影響とが強調されてきた。たとえば1925年生まれの高垣由紀夫は、「南洋一郎の『吼える密林』と、高垣眸の『豹の眼』は、正に韋編三絶したのである。私の南洋への憧れはこのころに源するのだ」と「ラディゲに憑かれて—私の読書遍歴—」(1956)で述べ

(p.146)、1928年生まれの手塚治虫は『少年クラブ』に初めて連載した『ロック冒険記』再刊のあとがきで、山中、南を筆頭にした豪華作家陣の『少年倶楽部』に「どんなに胸をときめかせたこと」かと回顧し(p.398)、『日東の冒険王』はじめ南の主要作品をほとんど読んだという手塚と同じ1928年生まれの高澤龍彦は、「少年冒険小説と私」(1976)で、愛読した山中峯太郎の『万国の王城』(1933)の主人公龍彦が「龍彦」という筆名を選んだ際に影響したかもしれないと告白し(高澤1994b, pp.475-6)<sup>3</sup>、少し遅れて『豹の眼』を好んだ1935年生まれの寺山修司でさえも、高澤の友人でもあったインド学者松山俊太郎との『少年倶楽部』をめぐる対談で「ぼくらは『マライのハリマオ』なんか読むといつのまにか日本陸軍の南進思想と、南洋一郎のライオンだとかトラだとかがたくみに二重写しになっていた。兵隊になって早くライオンに会いたかったのですからね」と語っている(p.25)<sup>4</sup>。

---

<sup>3</sup> 高澤の友人や知人も同じような証言を残している。小学校の頃の思い出として、俳人の武井宏は「彼[高澤]は、図鑑や年鑑みたいなものはいっぱい買ってもらっていた。それから南洋一郎の探検、冒険小説ね」と語ると、音楽評論家の三橋一夫は「その辺の本を読んだのは、たぶん彼のところ以外にはないだろうと思う」と回想している(高澤1993,p.12)。また高澤と縁の深かった桃源社元社長の矢貴昇も、高澤が山中、南、高垣が好きだったことに触れて、特に『万国の王城』の主人公「北條龍彦」が気に入っていたのでこれは筆名と関係があるのかもしれないと語っている(高澤1994a, p.13)。

<sup>4</sup> さらに寺山は劇団員と東南アジアへ遠征するのもその影響かもしれないと述べ(p.44)、「タイのバンコックあたりの雑誌なんかの少年小説」との共通点、特に「少年が眼がキ

上記のわずかな例からもうかがえるように、直接的な「南進思想」自体はともかく、南方への憧憬や幻想は、戦後になってもほぼそのまま継承されることとなった。それは、上記のようにこれらの冒険小説を愛読した世代自体が明言していることでもある。一例をあげれば、「三島由紀夫は私より四学年の年長だが」として、出口裕弘は、同じ世代の「南方憧憬少年」として、山田長政以来の「シャム」への憧憬が『少年倶楽部』の作品から生れ、『暁の寺』に行きついたのでとは推察している (p.98)。出口と三島の共通の友人であった澁澤龍彦は、なるほど筆名こそは山中のチベットや満洲を舞台にした小説に想を得たかもしれないが、最後の小説『高丘親王航海記』(1987)はまぎれもなく南方幻想を継承しており、澁澤自身、少年時代に愛読してその冒険小説のまねごとまで書いていた「南洋一郎のレミニッセンス」と語っている(澁澤 1996, p.191)。

高垣眸の『豹の眼』は、戦前の少年冒険小説の筆頭として必ず挙がる作品だが、今日、その設定は実に荒唐無稽に響く。母がインカ帝国の末裔という主人公の黒田杜夫が、清朝皇族の末裔と共に、豹という通称の「白人」を頭領とする悪の組織と闘い、インカの秘宝を手に入れようとするのである。たしかにインカと日本の取り合わせは唐突の感があるが、たとえば 1921 年の『日本及日本人』には東洋史学の大家桑原隲蔵が「仮定にあらず学説」と題して、コロンブスに先んじてアメリカを発見したのはアジア人であり、古代アメリカ文明はそんな対岸のアジアから影響を受けたという学説を紹介し、もしその後もアジア人がアメリカ大陸に移植し続けたなら「今日の如きアジアの移民排斥が起る筈がない」と記すなど、インカを同じアジア人と考える土壌は『豹の眼』の刊行前からあった(p.211)。それゆえ『豹の眼』でもワシントン海軍軍縮条約(1922)や排日移民法(1924)に言及があるように、「有色人種の盟主たる大日本帝国」(高垣 1928, pp.143-4)という認識ゆえに、アメリカがいわば人種の角逐す

---

リットしてて、ヨーロッパ人の悪玉と闘うというところが同じだ」と指摘している (p.42)。

る戦場として選ばれていると考えられよう。高垣の後輩として人気作家となった南と山中は、得意とする舞台こそ南北のアジアという違いはあれ、欧米に対して共闘する日本の少年少女という高垣の人種戦争の世界観と作風は、ほぼそのまま継承されている。満洲やチベットを舞台とすることが多かった山中は北進論、筆名にもあらわなように南洋を舞台とした南は南進論と対比することができるが、いずれにしても話型は共通する。実際、濫澤龍彦が偏愛した山中の『万国の王城』(1933)と続編『第九の王冠』(1935)もまた、同じ宝探しの物語である。ここではロシアに先を越されまいとジンギスカンの宝を探す龍彦少年が、ついに彼の墓をみつけ、ジンギスカンは義経だったことを知り、そこから日本がかの土地を支配すべき運命を悟るのである(橋本 2014a)。

舞台がアジアの北であれ南であれ、こうした『少年倶楽部』を中心とする冒険小説は、往古の英雄の足跡をたどり、その未完の企図を継承する必要性がしばしば確認される。その際には『第九の王冠』のように、世界帝国を打ち立てたジンギスカンが実は日本人だったというような、帝国意識の涵養のためには史実でさえねじまげ、奇想天外な展開まで辞すことがない。こうした牽強付会は、義経＝ジンギスカン説を広めた小谷部全一郎の『成吉思汗ハ源義経也』(1924)そのものである。実際、史実よりも時代の情勢にあわせて日本との民族的な共通点を強調する方が重要という姿勢は、小谷部も自覚しており、こうした奇説が、米国の排日運動に対する対抗言説の物語であることは著作でも示唆されている。

それだけに小谷部の行論は場当たりそのものとなる。たとえば『日本及日本国民之起源』(1933)においては、日本のユダヤ起源論を展開し、チベットから分かれて南下したヘブライ系が、タイ<sup>5</sup>に到達して、そこからさらに日本へ渡来したと、断言している (p.353)。その根拠として、アイヌ語で「日本人を外来人という意義にて、シャモと称する」(pp.353-4)ことを挙げており、どうや

---

<sup>5</sup> タイは 1939 年に改称された名称ではあるが、本稿では引用以外はシャムではなくタイと表記を統一する。



ら日本人の出身地を指しているらしいという古老の言葉を根拠に、これは「シヤム」にほかならないと展開するのである(p.354)。そしてタイと日本の人々が共通の祖先を持つことは、口絵にある和装した「先年来朝せる暹羅皇太子と其妃」からも「酷似の偶然にあらざるを確かめた」(p.354)と片付けてしまう。この皇太子とは、後のラーマ7世ことプラチャーティポック王のことであり、まだ親王だった頃、1924年に来日した時の写真なのだが、小谷部は本書刊行時、既に親王は即位して8年にもなることに気づかなかったと思しい。こうした小谷部の杜撰な主張を批判するのはたやすいが、そうした主張が英国産の宝探しを転用した冒険小説と通底しており、それらが共有する人種戦争的世界観を強固にしていたことは見逃してはならないだろう。

こうした世界観を象徴するのが、これらの冒険小説でほぼ必ずといってよいほど描かれる柔道が得意な主人公の少年と、彼が欧米の巨漢や成人を投げ飛ばす場面である。この原型は、高垣眸の『豹の眼』が確立し流布させたといつてよい。主人公の杜夫は柔道によって「白人」をしばしば投げ飛ばすのだが、これはおそらく日露戦争の際に日本の意外な善戦ぶりを描いた欧米の風刺漫画に端を発するもので(Hashimoto2011, 2015, 橋本2013)<sup>6</sup>、いみじくも芥川龍之介が「骨董羹」(1920)で述べたように、もともと日本の小説ではおよそ登場するものではなかった。

西人は日本と云う毎に、必柔術を想起すと聞けり。(中略)モオリス・ルブランが探偵小説の主人公侠賊リュパンが柔術に通じたるも、日本人より学びし所なりとぞ。されど日本現代の小説中、柔術の妙を極めし主人公は僅に泉鏡花氏が「芍薬の歌」の桐太郎のみ。柔術も亦豫言者は故郷に容れられざるの歎無きを得んや。好笑々々 (p.205)。

---

<sup>6</sup> たしかにシャーロック・ホームズの「空き家の冒険」(1903)に登場する‘baritsu’などの例もあるが、英語圏の冒険小説で柔術が広く登場するのは日露戦争以降のことである(橋本2013)。

芥川はあいにく 1927 年に死没したため、翌年の『豹の眼』を見ることはなかったが、『豹の眼』以降、多くの冒険小説の主人公が、柔道で大男を倒すことになる。南の『日東の冒険王』もその一例であるが、奇しくも南は、高垣が『豹の眼』で援用したであろう怪盗ルパン・シリーズを自由闊達に翻訳することで、戦後も引き続き人気を博することになった<sup>7</sup>。事実、シリーズ第一作『怪盗紳士』（ルブラン a, p.113, p.126）にはルパンが柔道を得意として技を披露する場面があり、南はその一節をほぼ 1907 年の原典通りに「こいつが日本柔道の手なんだ」と訳出している（p.126）<sup>8</sup>。

手塚治虫の『ジャングル大帝』に登場するケン一などのように、柔道有段の日本人キャラクターが屈辱や挑発を受けて欧米の巨漢を投げ飛ばすという場面は、戦後も漫画などでたびたび描かれた。手塚についていえば、柔道だけでなく『豹の眼』もその影を落としている。寺山修司は「『豹の眼』だって少林寺拳法でいかにして手の上に乗せた豆で相手のオデコを狙うとか、そういう技術だけを覚えていく」（p.39）と特記して、豆のようなものを指ではじくだけで致命的なまでに危害を及ぼす主人公の技が多くの読者を引きつけたと強調したが、手塚の『アラバスター』（1970-71 年に連載）にも、おそらく『豹の眼』からの転用だろう、指先で小石をはじくだけで相手を倒す秘術をもったタイトルと同名の主人公が登場する。なお本作は主人王がアメリカで人種差別に苦し

---

<sup>7</sup> なお山中峯太郎は、戦後はシャーロック・ホームズ・シリーズを自由に翻訳して名を馳せる。これらが事実上、翻案であったことは、たとえば北原尚彦が『発掘！子どもの古本』で指摘する通りである。その最たるものが、ルブランの原作がなく、南の創作とされる『怪盗ルパン ピラミッドの秘密』（1960）だが、これは豹頭の大僧官ガラハダが登場するなど、高垣の『豹の眼』へのオマージュとなった財宝争奪戦の物語である。

<sup>8</sup> 同じ 1958 年に出た中村真一郎訳では「この手は日本語でウデヒシギだ」（ルブラン b, p.65）と、原文の *udi-shi-ghi* の部分を無視せずに復元しており、以降の日本語訳でも、この有名な関節技が、たびたび踏襲されて言及されることとなった。

み、その復讐のため立ち上がるという点で、主題の点でも少なからず『豹の眼』を継承しているといえよう。

たしかに『豹の眼』における宝探しは、山中や南の冒険小説になると軍資金を現地調達する感があり、王道楽土再興という大義名分のために資金を外国や外地で入手するという主題は、まぎれもなく日本のアジア主義や植民地主義と連続している。ただし、それらの要素を希釈することで、戦後の大衆文化に『豹の眼』の物語が多く転用されたことはもっと目を向けてよいだろう。事実、南や山中の冒険小説は、題名を変え、わずかに本文を変更しただけで戦後も刊行されることが珍しくなかった。たとえば『日東の冒険王』は、1949年に『シバの魔神像』として刊行されたが、奥付には「著者補筆」とあるものの、変更はほとんどない。補筆は「土人」という単語が追加されたくらいで、これは悪漢が単独犯ではなく、タイ国内での内乱を企図しているかのような印象を与えるためだろう。むしろ多いのは加筆ではなく削除であり、対象は主に日タイ親善に関する箇所であった。日本の植民地や帝国を生々しく想起させず、活劇の舞台として異国を利用し、強きをくじき弱きを助ける物語として再利用されたわけである。『豹の眼』も、1959年にTVドラマとして人気を博するが、ここではインカ帝国ではなく、ジンギスカンの宝をめぐる争奪戦として作り直されている。マレーのハリマオが、翌1960年に『怪傑ハリマオ』として人気ドラマになったことを思い起こしてもよいだろう。

このように南方幻想を背景にしたものだけでなく、『豹の眼』は、邪悪な組織と戦いながら、虐げられた民族の秘宝を探しだし、挫折したユートピアを再建しようとする冒険物語として、ジャンルを超えて転用されることになる。もちろんそこには、屈折やひねりがしばしば加えられた。たとえば1926年生まれの星新一による商業誌デビュー作「セキストラ」(1957)は、インカ帝国の末裔らしき日本人が、南米で先祖の宝を見つけ、世界を一変させる短編だが、その主人公の内面を一切描かないなど、その後の星作品にも共通する冒険と成長への覚めた視線が早くもうかがえる。手塚にしても『三つ目がとおる』

(1974-78年に連載)となると、古代に栄えた三つ目族の生き残りという設定

からして『豹の眼』を思わせるが、むしろその三つ目族は邪悪な存在となっている。とりわけその「グリーブの秘密」編(1975)のエピソードは失われたかつての秘宝たる武器をもとに、「白人」の支配を打破しようとする「インディアン」たちが、かえってその強大な力によって自滅するという皮肉な物語なのである。ともにオカルト・ブームを背景にしている点で、『三つ目がとおる』は、山川惣治の絵物語『太陽の子サンナイン』(1967)と双璧をなすといっていよう(橋本 2009)。

以降も、政治的な正しさに巧みに適応することで、今なお無数の『豹の眼』の話形は繰り返されている。その際に重宝されたのが、アイヌの人々の秘宝をめぐる争奪戦を、民族の誇りを取り戻す政治的に正しい物語として作り替える設定であった。たとえば 1923 年生まれの矢野徹は小説『カムイの剣』(1970)の連作で、アイヌの人々だけでなく『豹の眼』よろしく舞台を北海道からアメリカまで展開し、アフリカ系アメリカ人やネイティブアメリカンまでもが連帯して仲間となる。それを受け継ぐように手塚は『シュマリ』(1976)で北海道の砂金探しとアイヌの人々との交差を描き、これらの主題は、おそらく『豹の眼』自身にはさして思い入れや親しみがなかったであろう世代の野田サトルの漫画『ゴールデンカムイ』(2014)まで受け継がれている。こうした『豹の眼』の話型を継承し変容させた戦後作品の発掘は、本稿の範囲を超えるため省略するが、高垣の『豹の眼』が 20 世紀末まで間断なく刊行され続けたことは特記しなければなるまい。『豹の眼』を中心とした冒険小説は、戦前のアジア主義と植民地主義とあいまって愛読されただけでなく、若干の変化こそあれ、同じ話型は戦後も継承されたのである。

### 3. 南洋一郎の『日東の冒険王』と高垣暁の『タイ国の冒険』—大東亜共栄圏の軍資金としての長政の遺産

『少年倶楽部』についての寺山修司との対談のなかで、1930年生まれの松山俊太郎は南洋一郎の『緑の無人島』に話題が及んだ時、『日東の冒険王』を寺山が読んでいないと聞いて以下のように紹介している。

『日東の冒険王』というのも、これは単行本で読んだんだけど、「少女倶楽部」に出ていて、夏の夕の散歩で買ってもらって蚊帳のなかで読んだ。それは少女・瑠璃子というのと立花学士というのがいて、瑠璃子のお母さんは怪外人ダブラという、すごい名前だけど——ダブラはシャムの人間ではじめは悪者ということになっているのが、あとでだんだんいってことがわかって和解するんだけど——それにかどわかされて行方不明になっておる。それを少女と青年がシャムの奥地まで尋ねて行って冒険が続発するんです。（寺山, p.10）。

松山もいうように物語は瑠璃子の登場から始まる。ただ、タイで父母の行方がわからなくなった彼女の母恋いと再会という要素は、あくまで副筋にとどまり、事実上の主人公はその名も日露戦争の英雄と同じ名字の東郷剛少年となっている。生別した父母との再会という主題は、いうまでもなく『少女倶楽部』の読者層を考えてのことであろう。『日東の冒険王』では瑠璃子が主人公として描かれ、少女小説的要素も抑えられているが、少年の冒険小説との混合は『少女倶楽部』において、しばしば見られ、その主従関係も容易に逆転するものであった。先に言及した濫澤が偏愛した山中峯太郎の『万国の王城』も掲載誌は『少女倶楽部』であり、こうした冒険小説はしばしば掲載されていた。戦後に改題された『少女クラブ』には手塚が『リボンの騎士』（1953-56）を掲載するなど、少女漫画の一つの源流となった『少女倶楽部』であるが、冒険小

説を掲載していたため戦前に多くの少年にも愛読され、戦後の少女漫画にしても、そうした冒険小説の要素は多分に受け継がれていたのである<sup>9</sup>。

『万国の王城』が北進論を背景にしてジンギスカンの宝を探し出す物語であるように、『日東の冒険王』は山田長政の秘宝を探す南進論の物語と要約できる。どちらも宝は大東亜が共栄する帝国の軍資金として登場する。タイで道半ばにして毒殺された長政が、その目的を継ぐ子孫へと財宝を残したことが、仏像に隠された古文書から明らかとなり、争奪戦が日本とタイのあいだで繰り返される。主人公の東郷剛は、『豹の眼』の黒田同様に柔道を得意とし、長政に仕えた男の末裔である老人に助けられ、宝の在処を記した古文書を読み解く。一方、タイ側の首領は、英国の大学で学び、日本に反感を抱く大僧官であり、宝を入手しようと古文書の秘密を知る博士を誘拐する。しかし、東郷少年の日タイ親善への一途な思いを知り、最後には涙を流して改心する。肝心の宝はといえば、さらなる宝が南海の島に隠されていることがわかり、日タイが手を携えて探索しようというところで、物語は唐突に終わる。

『豹の眼』以降の宝探しをめぐる冒険小説は、読者の代行的存在である少年少女らの成長と、その宝を基盤とした企図の正当性の確認にあると前述したが、『日東の冒険王』はまさしくその典型にほかならない。そのことは作者の南自体が、「この物語を読んだ皆さんが、シャムに親しみを感じ、シャム人といよいよ仲よくなったならば、それは山田長政の秘宝よりももっと尊い宝を二国が求め得たこととなります」（頁数記載なし）と、冒頭の序文で明記しておりである。したがって日本の少年によるタイでの宝探しの主眼は、宝そのもの

---

<sup>9</sup>『少女クラブ』における少女漫画と冒険小説の巧みな混合は『リボンの騎士』にも明らかだが、タイや長政をめぐるたとえば『日東の冒険王』のような主題も痕跡が残されている。たとえば『リボンの騎士』連載終了から2年後の1958年に付録として刊行された手塚の『みどりの真珠』（後に『孔雀貝』と改題）がその好例である。アメリカ映画『王様と私』に触発されたタイをモデルにしつつも、そこに手塚は長政以来の異人種間ロマンスを見事に組み合わせている（橋本 2014d）。

よりも、「日本人とシャム人の共同の大帝国をたてるための用意」(p.60)という山田長政の遺志を継承することにある。これは高垣眸の『龍神丸』と同一の主題であり、先の引用でみたように、秘宝を受け継ぐ正当性は血統ではなく、その精神を継承したしかるべき人間であることという条件が、『日東の冒険王』でも顔を出すことになる。探索の途中、東郷少年らは、長政の家来の子孫である盲目の老人アシュカに出会い、謎を解く鍵を彼が使う筈から見つけ出す。それに対してアシュカは、

この筈を子孫が手離さずに、いつも吹き鳴らせという遺言は、吹いている間に、この黄金鈴の在り場所を示した書き物が、飛び出すようになってあったからであろう。逆臣共に秘宝を奪われまいためのカラクリなのじゃ。その黄金鈴を、あなた方が発見した。いよいよあなた方は、秘宝を掘り出すために、わしの祖先の霊がここへお導きになったのであろう。日本の若いお方、どうか、これを手掛かりにして、わしの志をついで下されい(p.160)。

と述べる。秘宝を解く鍵と言い伝えを守り続け、もっとも財産を受け継ぐべき継承者が、あらかじめ東郷少年らにその権利を明け渡してしまうのである。こうして長政の秘宝を見つけた少年たちは、その宝箱に紙片を見つけたのだが、そこにある文言は「余はこの秘宝をここに隠す。が、なお多くの秘宝を南方海上の一孤島に隠し置けり。吾が子オインよ、それを求め出すべし。その孤島は……」(p.278)、と肝心の場所が欠損していた。つまり、「吾が子」らがさらに南進して宝を見つけ、あるいは宝を探すため南進を続けるよう、帝国を発展させる必要性と正当性が、再度、確認されるわけである。

したがって「日本人とシャム人の共同の大帝国」において主導するのが日本であることは物語で当然の前提となる。東郷少年は、アシュカらを迫害する悪の大僧官に対して、長政の宝は、タイのものでも日本のものでもなく両国のものと説き、「東洋で最も仲のよい国は日本とシャムなのだ。日本ではシャム

を兄弟の国と思っている。そのシャムの国力をもっと盛んにしてやりたいと、日本人はみな考えているのだ。」(p.272)と露骨にも口にする。それを聞いた大僧官は、「私ははじめて日本人が正義の国民であることを知りました。日本人がどんなにシャムを愛して下さるかもわかりました。」(p.273)と、あっさり日本の優位を受け入れ、改心してしまうのである。その上下関係は、

「大僧官、これがシャムと日本のものになったのですぞ。これを両国の役に立つ事業に使ったら、日本シャム両国の親善はいよいよ深くなって行くのですぞ」

剛が大僧官の手を握った。

「はい、私もそのために努力します」(p.278)

という、二人が和解する場面でさらに強調される。英国の大学で学んだ高位の聖職者が、息子ほど年の離れた少年に跪くのである。近代日本における長政の物語はコロニアルファンタジーとして機能したが(橋本 2015)、そこでは志半ばにして長政は逆賊によって毒殺され、その遺志と軍資金を息子オインが継承するという定型があった。南洋一郎は『日東の冒険王』から四年後、池田宣政の名で『南進日本の先駆者 山田長政』(1941)を刊行するが、そこで小説仕立てにして語られた長政は、王の代理によって王位が篡奪され、そのあおりで毒殺されたということになっている。『日東の冒険王』での大僧官が逆賊に、東郷少年が長政に見立てれば同じ物語であることは明らかだ。『日東の冒険王』の扉絵は、タイの王宮と思いき建物の上を鷹のような黒い鳥が不吉な姿で狙っているのだが、これはいわゆる君側の奸を図示したものにほかならない。『日東の冒険王』は、道半ばで殺された長政の「吾が子オイン」が、逆賊を屈服させ、和解する物語でもあるのである。

こうした主題は大仏次郎の『日本人オイン』(1932)など、すでに先行例は多く、戦後にも見られるものだが、上記のように大東亜共栄圏を連想させる日本とタイに関する上記の記述は、『日東の冒険王』の1949年版である『シバの



『魔神像』では削除されている。1937年4月という日付を持つ序文も収録されることはなかった。その序文は、「日本とシヤムは東洋で最も仲のよい国であります」という一文から始まるが、先にみたように作中でも東郷少年が語るこの記述は、いわゆる満洲国の不承認勧告案が提出された1933年2月24日の国際連盟臨時総会で、タイが棄権したことに端を発する。賛成42、反対1のなか、唯一棄権票を投じたタイを日本側が親日的行為と誤解し、急接近した時代だったのである。すでによく知られているように、当時、タイは国情がきわめて不安定であり、それゆえのやむを得ない棄権でしかなかった（吉村，pp.61-2）。ちなみにそうした内憂外患に苦慮していた当時の国王こそ、小谷部が日本人と酷似していると述べ、共通の祖先を持つ証拠として紹介したプラチャーティポック王ことラーマ7世である。

ここで注記したいのは、タイの棄権という瓢箪から駒が出るようにして、日タイ両国の親善活動が進み、それが冒険小説に取り入れられたことである。『日東の冒険王』の序文で南は、日タイの親善ぶりを示す一例として、上野動物園の人気者である象の花子がタイの「少年団」から贈られ、答礼に日本の「少年団」が1936年にタイを訪問した逸話を紹介している。タイの「少年団」とはルークスアのことで、日本の「少年団」同様に、1908年から本格化した英国のボーイスカウトをモデルとしている。こうしたタイと日本の「少年団」は1929年から交流があり、1935年の象の寄贈は、その結実であった（圓入，p.66）。そして南こと池田宣政も少年団とは浅からぬ縁があり、1924年にデンマークでのボーイスカウト世界大会に派遣され、そのときの経験を『少年倶楽部』に投稿している。そうして掲載された「懐かしき丁抹の少年」（1926）こそ、南の作家としての始まりであった。そもそもボーイスカウトの理念や運動はベーデン＝パウエルによる『スカウティング・フォア・ボーイス』（1908）から始まるが、この書物には、少年たちがスカウトこと斥候として大人顔負けに貢献する逸話や模範とすべき事例がちりばめられており、それらは少年たちが大人に伍して活躍する冒険小説と母体を共有していた。先に触れたように『豹の眼』では小石を強烈な威力で弾き飛ばす秘技が登場するが、それについ

て寺山は秀逸にも、「読者にとっては「少年倶楽部」のフォークロアというか、呪術的な連帯の中での細部との関わり合いがアイデンティティだった」と指摘した (p.39)。これはまさしくボーイスカウト運動における野営のための技術や暗号を使った通信などと通底するものであり、物語だけでなく細部においても、日本の冒険小説はその多くを英国の大衆文化を媒介とし、転用したことがうかがえる。

とはいうものの、『日東の冒険王』ではタイの少年は登場しない。南が『日東の冒険王』の冒頭で述べた少年団とルークスアの交流を思わせるような物語が書かれるのは、1942年になってからのことである。作者は南自身が影響を受けた高垣眸、その名を『タイ国の冒険』という。この中編では、長政の子孫だという少年山田龍太郎が主人公となる。日東中学四年生の16才の龍太郎は、ドイツ大使である父政敏の赴任するベルリンで高等学校へ入学するためヨーロッパへ向かうのだが、途中で先祖の山田長政の墓参をするよう言い渡される。容易に想像がつくように、龍太郎が訪れたタイに、かつての長政を毒殺に追い込んだような逆臣が登場する。実在の人物と特定されないようにであろう、イカン大公にルイジ侯爵とおよそ喜劇的な名前だが、興味深いのは、二人を陰で操っているのは英国だと明記しているところである。もっとも英国人自体は作中に登場しないが、『日東の冒険王』と同様に、鷹のように頭上を飛ぶ英国の飛行機が「タイ国に伸びる英国の魔手」と題された口絵で描かれ、ここでも君側の奸を打倒する現代の長政という定型がよりわかりやすく反復されている。実際のタイ国内政治においても、1936年4月に、ジェームズ・バクスター (James Baxter) の後任として財務顧問に就任したウィリアム・ドル (William Doll) は、日本政府としばしば対立し、つとに日本でも新聞で報道されていた。『タイ国の冒険』刊行より1年前の、たとえば1941年8月28日付けの読売新聞朝刊には、「危し独立国の誇」、「英米の魔手に揺ぐ泰」、「看過できぬ英人顧問の暗躍」といった見出しのもと「突然行われた内閣改造の裏に黒い手が動いていなかったか」とドルの策謀を疑い、「山田長政の史実を繰返し変らぬ泰の友好を信じるにはあまりに複雑な情勢である」と、長政を死に追い

込んだように英国の息がかかった逆賊が再び暗躍でもしているといった印象を読み手に訴えている。直接の影響やモデルとまではいえないものの、英国の魔手という類似した表現を用いていることから『タイ国の冒険』が同じ状況認識を共有していることはほぼ確実であろう。

こうした「危し独立国の誇」ともいえる国難を、『タイ国の冒険』はわかりやすい物語に仕上げている。英国を後ろ盾にして王位篡奪を狙う奸臣が、若いタイ国の王子を攻撃し、即位式の出席が不可能となっていたのだが、偶然にも龍太郎が王子と瓜二つであることがわかり、替え玉として王位継承の儀式に出席することで危機を脱するのである。ラーマ7世を日本人と酷似していると述べた小谷部の『日本及日本国民之起源』が着想源というわけではないだろうが、物語の主筋自体は、英国の人気小説アンソニー・ホープの『ゼンダ城の虜』(1894)そのままとなっている<sup>10</sup>。『ゼンダ城の虜』では、王の影武者を演じてヨーロッパの架空の国ルリタニアの危機を救った英国人男性は、王との堅い友情と英国のプレゼンスを象徴的に確認するのみで、何ら報償を得ずに国を去る。『タイ国の冒険』でも龍太郎はタイの国難を救って後、何も受け取らずにドイツへ向かうが、『日東の冒険王』と同様に、龍太郎は長政の企図こそ自身が継承すべきという正当性を自覚し、それをタイの人々から承認される。わざわざ母后が、龍太郎に対して長政同様に「タイ王国のために、類ない手柄を建てて頂きました」(p.222)と感謝の言葉を述べるのである。替え玉とはいえ、長政の末裔が即位する物語の含意は明らかだろう。

---

<sup>10</sup> 高垣は、1946年に『ゼンダ城の虜』を翻訳しているが、戦前から本作は王国の危機を偶然救うことになる民間人という物語の定型となり、歴史小説や大衆小説でも繰り返し復された。戦後も、漫画やアニメ、たとえば『ルパン三世 カリオストロの城』(1979)などにも転用されたが、特記すべきなのは藤子不二雄であろう。藤子は、ずいぶん端折ったものとはいえ、短編で「ゼンダ城の虜」(1955)を発表しており、ドラえもんシリーズの『のび太の大魔境』(1982)などは、同型のバカンの『魔法のつえ』(1932)をほぼ翻案した内容にほかならない(橋本2014c)。

『日東の冒険王』の序文で南は1935年にタイから寄贈された象について記したが、翌1936年にクロヒョウがタイから到着したことも忘れてはならないだろう。前述したような親日的なタイへの期待から、安川雄之助を団長として経済視察団がタイを訪問する(吉村, p.72)。結果は空振りに終わるのだが、安川は帰国に際してタイからクロヒョウを持ち帰り、それを上野動物園に寄付したのだった。そしてこのクロヒョウが、まもなく動物園を脱走してしまうのである。幸い死者がでることなく一日もたたないうちに捕獲されたのだが、クロヒョウの脱走という一報は、南洋一郎の秘境が東京で現出したような錯覚を与え、当時、幼少期を過ごした世代にひとかたならぬ衝撃を与えることになった。たとえば1932年生まれ小林信彦は「黒豹昭和十一年(1975)」というエッセイで、「自分の家の屋根の上、あるいは軒下に、黒豹が息をひそめている幻想に悩まされ、パニック状態におちいついた」(p.12)と告白している。一方で、猛獣狩への憧れは抜きがたく、「私の猛獣狩は殺すのは目的ではなく、捕獲にあった—これは南洋一郎の猛獣狩小説を読みすぎたせいであろう—」とも記して、

私はみずから絵入りの猛獣狩小説(?)を書き、日本軍が南方に進出するのに狂喜していた。なぜなら、マレー半島、ボルネオ、スマトラこそは—南洋一郎先生によれば—猛獣たちの宝庫であり、そこが日の丸の赤い色に塗りつぶされることは、いずれ、成長した私が猛獣狩をするときに、私にとって有利に働くにちがいないと考えたからである(p.12)。

と回顧している。こうした南洋一郎の描く狩猟への熱望と、期せずしてそれが実現してしまったクロヒョウ脱走事件によって引き起こされた恐怖は、吉村昭や澁澤龍彦など同世代のほかの作家たちも特記しているが、ここではその南の先輩作家にあたる高垣の『タイ国の冒険』での一場面のみ紹介しておきたい。英国兵から逃亡する龍太郎が、木に登ろうとすると樹上に黒豹がいたことに気づくのだが、その「暗夜の大冒険」と題された口絵に、1936年の脱走事件を

想起する読者は多かつたのではないか。二つの危険に挟まれてしまった龍太郎は、機転をきかせて、樹上の黒豹に近づいて挑発し、自分を追ってきた敵を襲わせることで難を逃れる。ここで高垣は、作風と物語を継承した後続作家の南洋一郎の南方幻想を、おそらくクロヒョウ脱走事件に想を得てとりこんだのであろう。『豹の眼』と同じ主題を南が『日東の冒険王』で展開した一方で、高垣もまた南の猛獣狩りの主題を借用したわけである。高垣の意図はともかく、『日東の冒険王』が描く白孔雀や象という従順な動物とは異なり、禍々しい闇のクロヒョウが捕獲されることなく人を襲う場面が『タイ国の冒険』に描かれたことになる。馴致されることなく、どこに潜んでいるかもわからないというその姿は、高垣以降、南が連綿と紡いできた南方幻想における一筋の亀裂を示唆しているとさえいえるかもしれない。

#### 4. 長政のオーストラリア上陸説から埋蔵金伝説まで—多文化主義の逸話としての転用

このようにタイが親日的と過剰に誤解され、冒険小説まで書かれるようになった契機である国連臨時総会から約9ヶ月後、日本の南進を警戒していたオーストラリアで、長政がオーストラリアに英国人よりも先に上陸したという説が発表された。提唱したのは、東洋学の博士という触れ込みで政治評論家としてオーストラリアで活躍していたゴダード(W. G. Goddard)である。おそらくその原型となったのは、詳細は省略するが、13世紀に東洋を旅したマルコ・ポーロの『東方見聞録』にある「ロカック王国 (Locac)」こそオーストラリアではないかという古くからある学説であろう。長く権威とされたユールによる『東方見聞録』詳注版でも、ユール自身はモンクット王が発見したとされるラムカムヘーン大王碑文を根拠にスコータイ王朝であろうと考証しているものの、このロカックをオーストラリアとする説が今なお根強いことについて言及

している(Yule, pp.278-280)<sup>11</sup>。つまり、中国人こそオーストラリアに最初に上陸した可能性があるわけで、この説を援用してであろう、ゴダードは、1933年11月11日付けのオーストラリアのクーリエ・メール紙の記事「オーストラリアに上陸した最初の海賊」で、長政はオーストラリアを訪れていたと主張したのである。日本の「ホジキ(Hojiki)」なる古寺に残されていた長政の記録に、彼が「セイヨー(Seiyo)」を訪れたとあり、これは中国の「リアン・シー(Liang Shi)」が記録する「ツーヨー(Tsu-yo)」こと南珊瑚海にはかならないというのである。そうしてゴダードは、南洋へと突き出たオーストラリア最北端のヨーク岬に長政の船が上陸していたはずだと結論づけたのであった。

さらにゴダードは翌1934年1月13日付けの同紙に続報「三世紀前のノース・クイーンランド」を掲載する。浅間神社のいわゆる長政戦艦図絵馬の図版を引用し、大阪の寺にあったという天竺徳兵衛の『渡天物語』をかっぎだし、「歴史家」大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)まで引用して、やはり長政はヨーク岬に到達していたと断言したのである。大鳥を歴史家と記していることや、「ホジキ」に「セイヨー」といった表記から判断する限り、ゴダードが日本語資料を正確に理解していたとは思えない。多分に参照した英語文献を誤記ないし曲解したかと思われるが、その一資料として考えられるのが、1929年に渡辺修二郎が日本に関する当時の代表的な英文雑誌『ジャパン・マガジン』に連載していた記事である。渡辺は、海外に雄飛した一連の日本人の一人として長政をとりあげ、大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)から一節を翻訳紹介しているほか、天竺徳兵衛の『渡天物語』にも言及しており(Watanabe, p.278)、掲載された長政の肖像画と浅間神社の長政戦艦図絵馬(p.276)も、ゴダードによる記事の図版と正確に一致する。ただ「ホジキ」や「ツーヨー」に対応するような記述はなく、ゴダードの典拠がどこにあるのかは依然として不明である。あるいは

---

<sup>11</sup> 邦訳では『元史』などに記載のある「羅斛」の表記があてられ、タイの一部と記されている(ポーロ, pp.147-9)。ユールは退けているが、ロカックはロップリ(Lopburi)とする説があり、「暹羅」という呼称の「羅」は「羅斛」に由来する(郡司 p.230, pp.494-5)。

典拠自体が存在せず、単にゴダードが資料を潤色しただけなのかもしれない。たとえばゴダードは大鳥の『暹羅紀行』を引用するが、渡辺の英訳した『暹羅紀行』の一節にも『暹羅紀行』全体にも相当する記述はなく、書誌のみをもっともらしく引用しただけで、内容を都合よく変更し、史料の捏造を行ったとも考えられるからである。ただゴダードが、日本人が広く海外に進出していたという歴史や物語に着目するきっかけとなったのは、どうやら先に言及した渡辺の連載であったらしいことは明記しておくべきだろう。1933年5月、渡辺の連載記事に言及しながら、ゴダードは日本人メキシコ入植説を紹介しているのである(1933a)。前述したように、この説は桑原隲蔵が何度も取り上げるなど、南アメリカをアジアの同胞とみなす視点をもたらした点で『豹の眼』における人種戦争的世界観と無縁ではなく、ゴダードがこの紹介記事から半年後に長政オーストラリア上陸説を提唱していることを考えれば、長政オーストラリア上陸説と『豹の眼』ひいては『日東の冒険王』は、ともに東洋人メキシコ入植説の副産物といえるかもしれないのである。

それでは、ゴダードの意図はどこにあったのか。同じ1934年の5月12日付けクーリエ・メール紙にその一端をうかがうことができる。その寄稿記事「クラ地峡を日本人が掘削して運河の計画」によれば、マレー半島のクラ地峡に運河を作り、シンガポールまで南下せずにインド洋と南シナ海を結ぶことで、日本はオーストラリアを含む大英帝国の海運を切り崩そうと画策しているという。その際にゴダードは、何の資料も明示せずに、この計画はもともと長政が最初に着手したと断言し、オーストラリアに警戒を訴えたのである。以降、ゴダードは、しばしば長政に言及しながら、日本の南進を警告する記事を寄稿する(Goddard1937, 1941)。たとえば今日では偽書として知られている田中議定書を引用し、田中義一首相が秘密裏に作成したとされる政策上申の中心は中国の植民地化と書かれていたにもかかわらず、さも文書のすべてに目を通し、南洋への危機が迫っているかのように訴えるなど(Goddard1939)、一般読者に聞き慣れない固有名詞をちりばめて煙に巻きながら、自身の政治的な主張を紛れ込ませる資料操作は一貫している。そもそもゴダードは台湾政府から資

金を得て、その宣伝活動に従事することになるので (Taylor)、日本の南進にオーストラリアの人々の注意と関心をひきつけるため、木曜島などの日本人移民の多いヨーク岬に長政が上陸していたと主張したと考えられよう。なお濫澤も愛読したという南洋一郎『海洋冒険物語』(1935)には、日本の少年が乗った船がオーストラリアの木曜島周辺に寄港する場面があり、19世紀後半から当地で真珠採集に従事してきた日本人移民は、南進論においてしばしば登場する定番の話題だった。このように国家や目的のためには、史実を無視し、時に史料の不正確な引用や曲解も辞さないというゴダードの手法は、小谷部全一郎を思わせる。

そもそもゴダードが参照した英文記事を執筆した歴史家の渡辺修二郎は、このように海外へ雄飛した日本人について博引旁証した大著『世界ニ於ケル日本人』(1893)の著者であり、その英文論考も旧著に基づいて大幅に増補した内容となっている。しかし、博識で目配りのよい渡辺もさすがのゴダードの記事は目に入らなかつたらしい。長政オーストラリア上陸説は、南洋一郎や竹越与三郎など南進論者が目にすれば飛びついたと思われる説だが、管見の限り、日本で紹介されたり、逆用されたりすることはなかったようだ。本国のオーストラリアでも事情は同じで、ゴダードが繰り返し主張したのみで、それ以外の分野や人々にはさして反響を与えることなく、そのまましばらく忘れ去られていった。

変化が訪れたのは1946年であった。オーストラリアの作家ゴールドスミスが、『ここに宝が眠る』という埋蔵金伝説についての一般書を書き、ゴダードの名はいっさい出さず、しかし、ゴダードの記事をほぼそのまま引き写し、長政はヨーク岬に上陸したと記したのである(Goldsmith, pp.10-1)。この際にゴールドスミスは、ここでもゴダードを下敷きにして鄭和が最初にオーストラリア



に訪れ(Goddard1932)<sup>12</sup>、そして日本の海賊長政が上陸したと記したのだった。ただ、題名とはうらはらに、ゴールドスマスは長政が宝を埋めたとは書いていない。

ゴールドスマスの記述に注目したのが、1938年から始まったオーストラリア固有性を見直すジンディーウォラバック運動の中心人物レギナルド・インガメルズ(Reginald Ingamells)である。彼は長大な物語詩『グレート・サウス・ランド』(1951)を刊行し、オーストラリアの多層性を強調した。ゴールドスマスに基づくことを注釈で明記しながら、アボリジニの住まう広大な南の土地を最初に訪問したのは中国の鄭和であり、そのあと長政が続き、そうしてポルトガル人始めヨーロッパ人が訪れたというのである。長政が登場するのは以下の二連である。

<長政>

日本の山田長政は／南へ四〇艘の海賊船を率いてやってきた／タスマンの時代より前にヴァン・ディーメンズ・ランドへ／伝説によれば、この海賊王子こと／長政は珊瑚海を知り尽くしていた／まるで自分の手のひらのように／そしてヨーク岬に上陸したという

<セイヨーとセイツォー>

ホジキの寺に眠る神聖な記録が／長政の航海を伝えている／セイヨー、セイヨーこと南の大陸までの／これはツーヨーと同じこと／さらに古い中国の記録リアン・シーによれば／それは南の土地、南にある珊瑚の地／セイツォー、セイツォーこと南にある真珠の地／これはブルームからはるかダーウィンまでのオーストラリアの海岸なのか／日本人が書きとめたセイツォーとは(pp.78-9)

---

<sup>12</sup> 管見の限り、鄭和の船団がオーストラリアに漂着したと英語圏で提唱したのは1932年のゴダードの記事が嚆矢かと思われる。もっともここでも資料を捏造した可能性が高い。

ヴァン・ディーメンズ・ランドとは今日のタスマニアであり、その島に最初に上陸したとされる17世紀オランダの探検家アベル・タスマンが、当時のオランダ領東インド総督の名前にちなんで名付けた古称である。インガメルズはタスマンの航海についても触れており、タスマンは、『東方見聞録』にある伝説の「ロカック王国」（本文では異称の‘Lucach’とある）の土地を明らかにしたと述べ(p.171)、そのマルコ・ポーロこそは中国でオーストラリア大陸について聞き知った最初のヨーロッパ人と記している(p.71)。長政オーストラリア上陸説は、こうした『東方見聞録』をめぐる一説がその母体であり、ゴダードのような自称専門家が俗耳に入りやすいよう資料を誇張あるいは捏造し、それがさらに作家や詩人によって物語化され、あたかもそのような記録があるかのように流布していったということになる。むしろゆかりがあるのは、ロカックこと暹羅に渡った長政なことを思えば皮肉な交差といえよう。その長政が訪れた土地も、ゴダードは控えめに最北端のヨーク岬にとどめていたのが、インガメルズになると、南はタスマニア、そしてダーウィンからブルームまでの長大な北部海岸線と、その活動範囲はオーストラリア大陸の半分近くを覆うまで拡張していった。これは日本における義経＝ジンギスカン説とも比較できる好対照な現象といえよう。義経が衣川で自害せずに生き延びたという江戸時代の義経北行伝説をもとに、義経は北海道から中国大陸へ渡ってジンギスカンになったとして小谷部が『成吉思汗ハ源義経也』（1924）を刊行し、そこから山中峯太郎の『万国の王城』といった小説により、伝説が物語によってあたかも事実であるかのように補強され流布していったからである(橋本 2014a)。

こうしたゴールドスミスやインガメルズをふまえて、長政はオーストラリアに宝を隠したという伝説を流布させたのが、同国の作家ホルトハウスである。その『珊瑚海の船』（1976）という読み物で、ホルトハウスは中国や日本にはヨーロッパに先駆けてオーストラリアについて地図や記録があるとして、そんなふうにヨーク岬とパプアニューギニアのあいだにあるトレス海峡諸島で神出鬼没に活躍し、スペイン船を悩ませたのが海賊の山田長政だと、典拠を一切示さ

ずに断言している。そのようにしてスペインから奪った「長政の宝は、いまでもヨーク岬から 69 キロにある岩だらけのブービー島洞窟に眠っていると伝えられている。往古の航海者が残した記録によればアポリジニはこの島に悪霊がいると信じているので近寄らないというが、これはおそらく彼らの先祖が日本の海賊と遭遇した経験ゆえのことだろう」(p.9)とホルトハウスは付言する。

1937年に南洋一郎は、「なお多くの秘宝を南方海上の一孤島に隠し置けり」という長政の遺言で『日東の冒険王』の末尾を結んだが、小説から約 40 年後のオーストラリアで、南進論者たちの想像力を超えて、しかし、日本の海外雄飛を喧伝する渡辺修二郎の記事の副産物として、スペイン船と海賊王長政との攻防とその秘宝伝説が紡ぎ出されたのである。

南の没する 4 年前のことであったが、1930 年代ならいざ知らず、この記述は日本でほとんど反響を及ぼすことはなかった。南の死没から一年後の 1981 年、日豪交流史を研究する遠藤雅子によって、長政オーストラリア上陸説は日本で初めて紹介される。読売新聞が「山田長政オーストラリア秘話」と題した取材記事を掲載したのである。ただインガメルズの詩を根拠として挙げ、その補強にゴールドスミスとホルトハウスに言及し、「ホージキ寺」を突き止めることが鍵と記す内容からも明らかなように、資料の文脈やゴダードにはまったく言及のない不十分なものだった。記事もわずかに『歴史と人物』が紹介したのみで(p.291)、オーストラリア研究でも黙殺され、遠藤雅子が『オーストラリア物語』(2000)で再度言及したものの、記事以上の進展は見られなかった。

この読売新聞の記事には、長政を描いた『王国への道』(1981)の著者として遠藤周作の談話が収録されている。1923 年生まれの前作は『日東の冒険王』について知らなかったようで、驚愕とともに「もしオーストラリアに『海賊王ヤマダナガマサ』の財宝があったという伝説を聞いていたら、あるいは少し書き入れていたかも知れんね」と語っている。ただ、たとえ遠藤が言及したとしても事態はさほど変わらなかったことだろう。南洋一郎が思い描いたような長政の秘宝を探ることが南進と無邪気に重ねられた時代はすでに過ぎ去り、

同じような宝探しの物語は、もっと政治的に正しい設定で作られるようになって久しかったからである。

## 5. 結 継承正当性の物語としての宝探し

以上のように高垣眸の『龍神丸』や『豹の眼』は、スティーブソン『宝島』をふまえ、『ソロモン王の洞窟』や怪盗ルパン・シリーズを援用することで、日本における宝探しの物語の原型となった。そこでは主人公の成長という教養小説的な主題に加えて、日本人の主人公が異国の宝を受け取るべき正当性が強調されることとなった。山田長政の秘宝をめぐる南洋一郎の『日東の冒険王』は、まさしく高垣の系譜に立つものであるが、『日東の冒険王』には、満洲国をめぐる国連決議においてタイが棄権したことから生じた日本にとって都合のよい「親日的」願望が織り込まれている。「日泰親善」幻想に水を差す英米勢力とその一派の排除が明治以降に流通した長政の歴史物語と重ねられ、長政の宝＝タイにおける日本の優位性が「日東」の少年少女に継承されるからである。さらに、これは高垣自身によっても反復されることとなり、その『タイ国の冒険』は、『ゼンダ城の虜』を下敷きにしながら、南と相呼応するように同じ物語を共有することとなった。

たしかに、こうした政治的な宣伝は舞台となったアジアへの欲望や関心と不可分のものではあったが、宝探しによる遺産の正当性を確認する物語は、そのまま戦後にも継承される。それは『日東の冒険王』から単に不都合な箇所を削除し、『シバの魔神像』と改題することでアジアを舞台にした冒険小説を装ったというだけではない。高垣を原作に山中の冒険小説を混合しつつ、舞台を特定されないエキゾチックなアジアとしたTVドラマ『豹の眼』はその好例であり、その後も『豹の眼』や『日東の冒険王』、『タイ国の冒険』の話型は戦後日本のポピュラー文化のなかで転用され、それは今日なお続いている。

『宝島』や『ソロモン王の洞窟』が舞台や設定を変え、政治的な正しさを考慮する形で、たとえば多国籍かつ多文化の社会として海賊世界を描いた映画『パ

イレーツ・オブ・カリビアン』(2003)シリーズなどへと継承されたことと並行する現象といえるだろう。

その点で長政オーストラリア上陸説の発生と変容は、宝探しの冒険小説が異なった時代や文脈に容易に適応できることを示唆している。マルコ・ポーロの『東方見聞録』研究を背景に、渡辺修二郎の英文記事を流用することでゴダードが日本の南進を警告するため1930年代に提唱したのが、戦後になるとオーストラリアの重層性を示す逸話として詩人インガメルズなどによって転用されたのである。そもそもゴダードが日本の植民史に関心をもった一つのきっかけがアジア人アメリカ発見説であり、これこそ『豹の眼』でインカの秘宝をめぐる東西人種戦争という設定を生み出す土壌となったのだが、両者は交錯したまま逆輸入も相互影響を引き起こすことがなかった。こと英米の場合、黄禍論的な脅威の言説はすぐ日本で紹介されるか、アジア主義的な言説に翻案され、それがさらに黄禍論の言説を引き起こすという相互作用が珍しくなかった。しかし長政オーストラリア説は、日本からオーストラリアへと一方向のまま日本の南進論を刺激することなく、ようやく紹介された1981年には、南方幻想こそは存続していても、南進論自体はとうに失効しており、さして関心をひくこともなかったのである。たとえば、そんな変化を示す一例として志茂田景樹の『南海の首領クニマツ』(2012)が挙げられる。本書は久々に書かれた長政の秘宝をめぐる海賊物語だが、そこにオーストラリアが登場することはなく、海外への雄飛は帝国主義を連想させぬよう、タイの人々ほか異国表象も政治的な正しさの規矩を超えないよう、物語以上に表現に周到な配慮がなされているのである。

このように時代の政治的な正しさや文脈に巧みに適応しつつ、財宝継承の正当性という『豹の眼』以来の主題は、戦後も脈々と受け継がれている。実際、1930年生まれの和久俊三による『山田長政の秘宝』(1986)は、タイへの日本企業進出とその軋轢という時代状況を反映しつつも、高度経済成長期版『日東の冒険王』といった感があり、物語は高垣以来の古典的な宝探しの主題を反復している。もっとも『日東の冒険王』のようにわかりやすいタイ人の悪役が

登場して最後に改心するというわけではない。和久は人種差別的な表現を避けながらも、タイがいまだ十分に近代化していないことを作中のタイ人ガイドによって示唆し、長政の宝を受け取る資格がないように描き出す。実際、宝は謎を解く駿府大学の学生の手合法的に落ちるよう、仕掛けがこらされている。長政の財宝は戦前にタイで日本の軍部が発見し、それを日本に埋めたため、タイ政府は返還を要求するも法的に無効というのである。その宝がスペイン由来の黄金だったというあたり、スティーブンスンの『宝島』に登場する海賊の財宝が多くスペインから奪った金銀という設定と共通しよう。タイ表象の是非はおくとして、宝探しを継承正当性の物語とする『龍神丸』以来の主題がここでも受け継がれていることは一目瞭然であろう。

そもそも高垣は、自身こそ『宝島』を正しく継承しているという強い自覚があった。高垣は1946年に『宝島』の翻訳を刊行した際、「始めて『宝島』を読んだのは、今から三十三年前、ちょうど十四五歳で、中学二三年生の頃」と序文で回顧しつつ、今日となっては日本の子供に面白さが伝わりにくく文章も難しいことから、原作は脇において、「殆ど暗で覚えている『宝島』の物語を、心に浮かぶままに、全く自分の作品として再現」と明言している。というのも、そうすることで「イギリスの海賊魂とでもいうようなものが、日本の少年少女諸君に、ハッキリと浮かび上って、わかって頂けると信じて」いるからというのである(スチブソン pp.4-5)。実際、高垣の『宝島』が原作以上に面白く反響を与えたことは指摘があるが(佐藤)、特記したいのは、これこそ高垣が『龍神丸』を執筆したのと同じ方法であり、それゆえ同じような自負をもって高垣が『豹の眼』を描き、ひいては南や山中がホームズやルパンを転用あるいは翻案していったと考えられることである。後続であっても宝を継承する正当性を有するという主題が「イギリスの海賊魂」であるかどうかはともかく、流用と改良の海賊魂は、『宝島』を翻訳する前からすでに高垣によって「日本の少年少女」に伝えられていたのは、これまでの作業からうかがえるように、高垣が信じていた以上であったのである。

本稿は大阪大学・未来知創造プログラム「日タイ文化交流史の研究－山田長政から柳澤健まで－」および科研費・基盤（C）「世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究」（研究代表者橋本順光）の成果の一部である。

### <参考文献>

- 芥川龍之介(1996)『芥川龍之介全集』6巻,岩波書店
- 池田宣政(1941)『南進日本の先駆者山田長政』三省堂
- 遠藤雅子(2000)『オーストラリア物語』平凡社
- 圓入智仁(2014)「1935年にシヤムが日本に象を贈った経緯と目的:ボーイスカウトにおける国際交流の一事例」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』46号
- 小谷部全一郎(1933)『日本及日本国民之起源』厚生閣
- 北原尚彦(2007)『発掘!子どもの古本』筑摩書房
- 桑原隲蔵(1968)『桑原隲蔵全集』1巻,岩波書店
- 郡司喜一(1934)『十七世紀に於ける日暹関係』外務省調査部
- 「豪州の発見者は山田長政!？」(1981)『中央公論 歴史と人物』10月号
- 小林信彦(1976)『東京のドン・キホーテ』晶文社
- 佐藤宗子(2000)「高垣眸『宝島』再話の挑戦:プロット再生の可能性」『千葉大学教育学部研究紀要. II, 人文・社会科学編』48号
- 澁澤龍彦(1993)武井宏・三橋一夫インタビュー「小学校時代のこと」『澁澤龍彦全集月報4』『澁澤龍彦全集』4巻,河出書房新社
- 澁澤龍彦(1994a)矢貴昇司インタビュー「桃源社と澁澤龍彦」『澁澤龍彦全集月報14』『澁澤龍彦全集』14巻,河出書房新社
- 澁澤龍彦(1994b)『澁澤龍彦全集』15巻,河出書房新社
- 澁澤龍彦(1996)『澁澤龍彦全集』別巻2,河出書房新社
- スチブソン(1946)『宝島』高垣眸訳,大日本雄弁会講談社
- 高垣眸(1928)『豹の眼』大日本雄弁会講談社

- 高垣眸(1942)『タイ国の冒険』同盟出版社
- 高垣眸(1997)『龍神丸・豹の眼』講談社
- 土屋了子(2003)「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』5号
- 出口裕弘(2002)『三島由紀夫・昭和の迷宮』新潮社
- 手塚治虫(2010)『手塚治虫文庫全集 ロック冒険記』講談社
- 寺山修司(1978)『浪漫時代 寺山修司対談集』九藝出版
- 橋本順光(2009)「デニケン・ブームと遮光器土偶＝宇宙人説」『オカルトの惑星 1980年代、もう一つの世界地図』青弓社
- 橋本順光(2012)「カーゴ・カルト幻想－飛行機崇拜の物語とその伝播」『天空のミステリー』青弓社
- 橋本順光(2013)「日露戦争における柔術と武士道の流行」『阪大比較文学』7巻
- 橋本順光(2014a)「境界を越える義経ジンギスカン伝説－大陸雄飛論から冒険小説まで－」『ライブ・イン・ボーダースタディーズ』13号
- 橋本順光(2014b)「繰り返されるパターン1」『産経新聞』関西版夕刊1月30日
- 橋本順光(2014c)「繰り返されるパターン4」『産経新聞』関西版夕刊4月24日
- 橋本順光(2014d)「手塚治虫に見る映画『王様と私』の流用－「孔雀貝」と『火の鳥』－」『日本研究論集』10号
- 橋本順光(2015)「ポカホンタス伝説としての山田長政物語－明治の小説から大映の映画まで－」『タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書 2014』
- ポーロ、マルコ(1971)『東方見聞録』2巻, 愛宕松男訳, 平凡社
- 三島由紀夫(2003)『三島由紀夫全集』29巻, 新潮社
- 南洋一郎(1937)『日東の冒険王』大日本雄弁会講談社
- 南洋一郎(1949)『シバの魔神像』光文社



- 吉村道男(2002)「駐在国公使報告等にみる一九三五年前後の日本・タイ国関係の一面」『外交史料館報』16号
- 「山田長政オーストラリア秘話」(1981)読売新聞夕刊7月4日
- ルブラン, モーリス(1958a)『怪盗紳士』南洋一郎訳, ポプラ社
- ルブラン, モーリス(1958b)『強盗紳士ルパン』中村真一郎訳, 早川書房
- Goddard, W. G., (1932). Did the Chinese Find Australia?, *Brisbane Courier*, 1932 August 27
- Goddard(1933a). Columbus and Japan, *Brisbane Courier*, 1933 May 6
- Goddard (1933b). First Pirate to Visit Australia, *Courier-Mail*, 1933 November 11
- Goddard (1934a). North Queensland Three Centuries Ago, *Courier-Mail*, 1934 January 13
- Goddard (1934b). Isthmus of Kra, *Courier-Mail*, 1934 May 12
- Goddard (1937). Japan's Aspirations and Her Move Southward, *Maryborough Chronicle*, 1937 September 22
- Goddard (1939). Japan Moving South Rapidly, *Maryborough Chronicle*, 1939 March 18
- Goddard (1941). Thailand--Japan's Next Victim?, *Mercury*, 1941 August 5
- Goldsmith, Frank H. (1946). *Treasure Lies Buried Here*. Perth: C.H. Pitman.
- Hashimoto, Yorimitsu (2011). 'Soft Power of Soft Art: Jiu-jitsu in the British Empire of the Early 20th Century', *Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of "Asia" under the Colonial Empires*. Kyoto: International Research Center of Japan.
- Hashimoto, Yorimitsu (ed.) (2015). *Caricatures and Cartoons, 1890-1905: A History of the World*, 3 volumes. Tokyo: Edition Synapse.
- Holthouse, Hector (1976). *Ships in the Coral*. Melbourne: Macmillan.
- Ingamells, Rex (1951). *The Great South Land: An Epic Poem*. Melbourne: Georgian House.

Taylor, Jeremy E. (2007). "Taipei's Britisher": W.G. Goddard and the Promotion of Nationalist China in the Cold-War Commonwealth," *New Zealand Journal of Asian Studies* 9.

Watanabe, Syujiro (1929). "The Japanese and the Outer World, Ch XXII, The Exploits of Yamada Nagamasa, A Siamese Prince--A Battle Between the Japanese and Siamese", *Japan Magazine* 19(7).

Yule, Henry, (1903). *The Book of Ser Marco Polo the Venetian, Concerning the Kingdoms and Marvels of the East*, vol.2. London: John Murray.